

初めてモンゴルを訪れたのは2015年7月。

草原マラソンに参加するためでした。

ランニングを始めて2年経ち、いろんな大会に出て走ることが楽しくなってきた時期でした。たまたま大会エントリーのサイトで見つけて、4日間でいけるとわかり、参加を決めました。モンゴルは、以前から興味があったので一石二鳥の旅でした。

私はモンゴルについて調べもせず、草原とゲル、星が綺麗に見えるところ...草原で走ってどんな感じなんだろうとワクワクしたのを思い出します。羊料理が苦手なので、マラソンツアーに申し込んでから、両国のモンゴル料理レストランで羊料理に挑戦したことも今では懐かしいです。

初めてのモンゴル草原マラソン、モンゴル国立大学の学生さんが通訳ボランティアしてくれて、言葉の心配は全くなく、楽しく過ごせました。一緒に過ごした4日間が濃厚で、今までの海外旅行とは全然違う経験ができて、モンゴルが大好きになりました。

私をモンゴル大好きにしてくれた一番の要因は、通訳としてサポートしてくれた青年の存在です。帰国後も彼とは定期的に連絡をとり続け、今年、モンゴルで再会することができました。私が彼のお母さんより年上だったこともあり、彼は私のことを「お母さん」と呼んでくれます。モンゴル再訪は彼との再会があったから...と言っても過言ではないでしょう。

2度目のモンゴルは2017年の9月。残暑厳しい日本から日本の真冬のような寒さの地に降り立つのは不安で、ネックウォーマーにレッグウォーマー、防寒グッズで準備万端、空港出口に。外に出ると、ツアーのお迎えの横でモンゴルの息子くんが手を振って待っていました。本当に本当に嬉しい再会でした。

空港からホテルまでバスで移動しましたが、金曜の夜だからか大渋滞。ホテルに着いたのは22時近くでした。ほっとして、夕飯をどうするかなんて考えてると、ホテルのロビーで息子くんから、「明日の朝は6時に迎えに来ます」と。そんなに早く？え？無理しなくて大丈夫だよと伝えましたが、古都カラコルムに連れて行くとのこと。片道350キロもあるらしい。

日帰りで行ける距離じゃないよね？というこちらの不安に、大丈夫と言い切る彼。事前に行きたい場所を聞かれて、ラクダに乗りたいたいは言ったけど...往復700キロですか...???

戸惑いながらも、じゃ明日ねと別れました。

2日目の朝、半信半疑のままロビーに行くと、笑顔の息子くんが待っていました。お天気は曇り。天気を心配する私を気にする様子もなく、空を見上げて「行きましょう！」と出発。

弾丸ツアーが始まりました。

早朝のウランバートルは流石に道が空いていて、赤信号で止まるのがもったいないくらい。少し行くと一本道になり、ひたすら走る。とことどころ、道路に穴があり、それらを避けながら100キロの速さで、ひたすら走る。普段、車に乗らない私は本当は怖かったけど、息子くんを信じるしかなく...

ただひたすら走っていると、モンゴルらしい風景に出くわす。羊や馬の群れ。草原に勝手に道を作ったんでしょとでも言ってるかのように悠々と渡る。途中、車とぶつかったと思われる家畜が何頭か倒れているのを見た私が心配して騒いでると、息子くんは「大丈夫」と一言。クラクションを優しく鳴らしながら通り過ぎます。

しばらくして、急に車を止めて外に出たと思ったら道の脇で用を足す。え？お母さんはここでは無理かな(^\_^;)と、私は笑ってごまかす。車の外で休憩していると、馬に乗った遊牧民が近づいてきて彼と話している。どこへ行くのか聞かれた、自分は良い夏でしたか？と尋ねたとのこと。モンゴルでは普通の挨拶のようだ。会話に入れないのが寂しかったが仕方ない。だって、モンゴル語を全然勉強してない自分が悪いのだから。

運転再開し、またひたすら走る。とにかく走る。途中でラクダを発見し騒ぐ私を「帰りに乗るから」となだめ、車は一路カラコルムを目指す。しばらくするとХАРХОРИНと書かれたゲートを通す。ついに来た！草原の中に急に町が出現した。新しそうなホテルで昼食を取る。息子くんは少な目のパスタしか食べなかったの、それしか食べないのかと聞くと、「運転あるから」と...そうだった、往復700キロ、彼は運転しなければならなかったのだ。ごめんよ、息子くん。母はツオイワンにホーショールも美味しくいただきました。

食事の後、モンゴル最古のチベット仏教寺院エルデニゾーへ。こじんまりしているけど、厳かで不思議な気分になる。遊牧しながら移動して暮らすモンゴルの人たちが、建物を残しているのはすごく貴重なことらしい。息子くんは、これを私に見せたかったのだ。せっかく来たので、昔の衣装を着て記念撮影もした。でも、私たちにはあまり時間がなく、すぐに来た道に戻る。

また一本道をひたすら走る。彼は、100キロ近く出てるのに前の車をビュンビュン抜く。私は、草を積んだトラックの積み荷の量に圧倒されていた。どうやったら、そんなに沢山積めるのか？というくらいに積んでいるトラック、衝突したら絶対横転して、草はバラバラになるでしょ！と言う感じ。

息子くんを見守っていると、時々車を中央に寄せて、ブツブツ言ってるかと思うと反対車線に出て前の車を追い越している。彼は、対向車が何台くるか一瞬で数え、通過する車の台数を確認して、追い越していたのだ。それがわかれば私も手伝うということで、私が対向車を確認して、「3台来るよ、OK!、まだダメ!」と、2人の息を合わせて、猛スピードのドライブ。緊張で全然眠気は襲ってきませんでした。

どのくらい戻ったのかわからないけど、ラクダに乗れるスポットに到着。ラクダは想像より大きく、コブは柔らかでした。モフモフで、気持ちがいい。ラクダには1人で乗るけど、小さな子どもがラクダを引っ張ってくれる。でも、その子どもは下を向いていて楽しそうじゃない。親のお手伝いなのだ。息子くんが話しかけると、疲れる〜と愚痴ってるとのこと。30分くらい乗ったあと、子どもたちにお

札にミルクキーをあげようとしたら、お母さんもしっかり自分の分をキープ。ちょっと面白かった。ラクダとご家族にさよならして、私たちはウランバートルへと急いだ。

ウランバートルに近づくと連れ、渋滞がひどくなる。19時から翌日の草原マラソン参加者の歓迎会があるので、遅れてはいけないと思いながらも、大渋滞の中、みんながみんな、クラクションを鳴らして、我れ先にと運転している様子を目の当たりにして、言葉が出ない。

結局、30分近く遅刻したと記憶しているが、別に誰も気にしておらずお咎めなし。モンゴル人は小さなことは気にしない。宿泊しているフラワーホテル近くのウクライナレストランで、初めてのウクライナ料理をいただき、他のランナーや通訳ボランティアの学生と交流する。楽しかった。

前回もお世話になったマラソンツアーの担当者に、往復700キロの旅を無事終えたことを報告すると、本当に行ったのかと驚かれた。息子くんが私のことを大切に思ってる証拠、モンゴル人はハッキリしてるからと、教えてくれて、改めて感動する。

マラソン当日。

気持ちよく晴れたけど、風が強く寒い！

草原の中に現れた競馬場。観客席があるから、それらしく見えるけど、コースがどれなのかはわからない。そこを私たちは走った。

スタート直後は、一群になってみんな走っていたのに、少しすると一列になり、気がつくとも周りに人がいなくなり、この方向で合っているのかと不安になる不思議なコース。

途中、ボランティアの女の子が、コースを案内する紙を持って立っていて、ペットボトルの水をくれる。給水したくてもらったが、飲みきれないのでペットボトルは持って走る事になり後悔する。走り慣れてるはずの10キロなのにキツイのは標高のせいかな...?などと考えながら、2度目のモンゴル草原マラソンを楽しんだ。

完走後は、草原でパーティ。羊肉の料理や果物、お菓子など手作りのおもてなし。草原は風が強く寒かったけど、それも含めて楽しかった。普段、羊は苦手なのにモンゴルだとパクパク食べられる。本当に美味しい。2年ぶりの草原、来れて良かった。

弾丸ツアーの今回のモンゴル訪問。マラソンの翌日、朝の便で帰るため、まだ暗いうちにホテルをチェックアウトすると、ホテルのロビーに息子くんが来ていた。今日は仕事があるのに空港まで見送りに来てくれると言う。嬉しかった。

空港でお別れするとき、息子くんからのプレゼントはアルヒとウランバートルのガイド本。嬉しくて泣く私に、モンゴル人は泣かないと冷静な息子くん。文化の違いを感じつつ、涙は止まらない。ありがとうね、日本に遊びにおいで、またね！と、ハグして手を振った。